「今までお嫁さんになるために勉強してきたの？」

高い偏差値の高校をめざして

私は、小さい頃から負けず嫌いだった。だから、小学校の頃から授業をしっかり聞き、テスト前には自分自身で勉強するといったように過ごしてきた。中学にあがってからも、より一層勉強を頑張った。できるだけ高い偏差値の高校に入学するために。毎日の授業はしっかり聞き、きちんと宿題もこなし、週に何度かは塾にも通っていた。

テストの二～三週間前からは、夜遅くまで勉強し、土日は塾の自習室に行き、夜遅くまで残り、納得がいくまで分からないところを、先生に質問したりもした。塾で宿題として出されたプリントは、もちろんすべてこなし、新しい他のプリントをもらって勉強することもよくあった。その甲斐もあって、いつも定期テストは、ほとんど見たことのある問題ばかりを解いていく感じだった。

負けず嫌いな私にとって、テストでの順位や模試での偏差値は、とても重要であった。そうして、次第にできるだけ偏差値の高い高校に入学することを目標とするようになった。三年間、勉強をおろそかにすることなく頑張ってきたのに、第一志望の高校には合格することができず、第二志望の高校に進学することになった。

進学高校での受験勉強生活

私は、いわゆる進学校と呼ばれる高校に入学した。そこの学生は、一見派手で自由に学生生活を送っているようにみえるが、実際は違った。校則も緩かったため、化粧をしている子もいれば、髪の毛を染めている子もいた。しかしみんな、勉強に対しての熱意はすさまじかった。

どんなに派手で、勉強になんて興味なさそうに見えても、「やるべきときはやる子」ばかりだったのだ。みんな、国公立を目指し、できるだけ偏差値の高い大学に入学しようと、一年生の頃から頑張っていた。高校の先生も、私たち学生にいつもこう教えた。「できるだけ偏差値の高い有名大学へ行け。浪人して当たり前。有名大学に通えば、それが就職を成功へと導くんだ！」と。そのような高校で3年間過ごす中で、私も自然に、全国的に有名な大学に進学することを夢見るようになった。そして、私はいつからか、人生の最終ゴールは大学名にあると思うようになっていた。

高校三年生の秋、私は大学受験を控え、とても悩んでいた。それは、価値観の違いがうんだ大学選びの違いだった。偏差値を重視する大学選び、そこに重点を置かない大学選び。私は、全国的に名の通った大学に行くために、県外の大学へ進学したいと思っていた。家族にそのことを相談すると、「女の子が1人暮ら

しをするのは危ないし、心配だから、家から通える大学にしなさい」と言われてしまった。

その頃の私は、高校の先生や周りの友達の影響から、家族の心配などまったく受け入れがたいもので、大学受験において妥協など許されないと思いこんでいた。そこで、家族との相談の結果、新幹線で家から通える大学と、両親が勧める女子大を受けることに決め、志望校調査票を担任の先生に提出した。

どうして女子大を受験するの？

それからすぐに一人ずつ、その調査票をもとに、担任の先生と話し合う機会があった。私は、今の自分のレベルからは挑戦にあたる県外の大学と、両親の勧める女子大の二校を受験するつもりだと言うと、先生の表情が曇った。先生は、「どうして女子大を受ける必要があるの？　あなたは、なんのためにこの高校に入学して、今まで勉強してきたの。結婚をするために、今あなたはこの高校にいるわけじゃないでしょ」と私に問いかけてきた。私は、衝撃を受けて固まった。

自分でも、女子大を受験することに対して、少なからず抵抗はあったものの、あれほどまで先生に言われるとは思いもしなかった。今でも、この情景を思い出せるほどだ。それ以来、先生や学校の友達の前では、「努力もせず、すぐ諦める子なんだ」というレッテルを貼られるのが怖かった。それと同時に、恥ずかしく感じられ、いくら滑り止めであったとしても、女子大を受験することなど、口が裂けても言えなかった。

女子大に入学することを決めて

そうして、受験も終わり、いよいよ結果発表。残念ながら、第一志望の県外の大学に落ち、もう一つの女子大に合格するという、私にとって信じがたい結果となった。三年間進学校で過ごし、「偏差値がすべて。有名大学が人生のすべて」と思い込んでいた私にとって、この結果はとても簡単には受け止められるものではなかった。

私は、すぐに家族に、「一年間浪人させてください」と話をしてみた。しかし、家族は、「浪人はやめなさい。女子大に通えばいいじゃない。大学に入るのに、偏差値がすべてではないよ。もっと視野を広げなさい」と言った。家族は、私が春休みのあいだ中、ずっと私に女子大に通うよう説得し続けた。家族の中だけにいると、日に日に、「女子大に行くのも悪くないんじゃないか」と思えたりもしたが、高校の友達に会えば、そんな感情は一気に吹き飛んでしまった。「本当にこれでいいの？　みんなは行きたい大学に入れるまで浪人する意気込みなのに」と自分自身によく問いかけた。

同じクラスの子は、半分ほどが浪人を決めていた。彼らにとって、一年間行きたい大学に入るために他の子たちに遅れることなど、全然恥ずかしくないことで、逆に誇りさえ感じられた。そういう姿を見ると、余計に自分自身が恥ずかしく、自分のこれからの人生は終わったようなもの、だと思った。

春休みが終わる頃、私は大学で留学をさせてもらうことを

約束に、しぶしぶながらも、女子大へ入学することを決めた。家族はみんな、「日本の中なら、どこの大学に行っても、自分次第で同じことを学べる。でも、海外に留学すれば、今まで見たこと感じたことのない世界がたくさんあって、そこでしか学べないことがある。だから、同じ一年を過ごすなら、浪人に費やすのではなく、留学した方がもっと有意義な時間になるんじゃない？」と私に言った。中学生の頃から、いつかは留学に行きたいと思っていた私は、この言葉を信じてみることにした。

女子大で自信が生まれた

入学式当日。気が進まなかったが、一応入学式へ行った。会場に入ってみると、今までとは違った周囲の雰囲気をすぐに感じ取り、それと同時に戸惑った。「やっぱり私の行きたい大学はここじゃない」と強く思った私は、家に帰り、母に泣きながらお願いした。「来年もう一度受験して県外の大学に行きたい」と。

春休みの間、ずっと私を説得し続けてきた母も、さすがに、私を女子大に通わせ続けるのは無理だと感じたと、あとから聞いた。私は女子大に通いながら、受験勉強を並行してやり、来年もう一度、受験することを心に決めた。

記憶があいまいだが、たしか入学式の次の日はオリエンテーションがあり、その中で英語のクラス分けのテストがあった。これまで偏差値ばかり追い求めてきた私にとって、テストは重要なもの。そんな私は、このまま女子大に通い続けるのは嫌なのにもかかわらず、どうしてもこのクラス分けのテストを受けずにはいられなかった。そして、そのテストの結果、私は一番上のクラスに入ることができた。高校のときには、なかなか結果を残すことができなかった私にとって、このとき中学生以来の快感を久しぶりに味わうことができた。

こうして始まった大学生活。嫌々とは言いながらも、中途半端は嫌だった私は、心を入れ直して勉学に励もうと心に誓った。

大学での授業を受けるうちに、高校時代は、努力しても、なかなか自分が思うような結果が出せなかったが、ここの大学では自分が頑張れば頑張るほど力になり、それが成果としてでるような気がした。その感覚が、私にとって快感になった。

高校では、自主自立が基本で、先生は勉強に対して口出しはしても、温かくサポートはしてくれなかった。でも、ここの大学の先生は違った。私が望めば、望むほど、より一層それが叶うように、相談にのってくれたり、温かくサポートしてくれる。そのうえ、だんだん友達も増え、徐々にこの女子大に通うのも楽しいかも、と思えるようにまでなり、自然に来年受験をし直そうという気持ちはなくなっていった。だからといって、周りの人に胸を張って、女子大に通っていることを言えなかったが。

カナダへの留学

私は、大学生の間に、英語をペラペラと話せるようになることを夢みていた。二年生の後期に中期留学として、私は大人気のカナダに留学したい一心で、その選抜に使われる一年生の冬の

ＴＯＥＩＣの勉強を頑張った。その結果、ＴＯＥＩＣの点数自体は決していいとは言えないが、なんとかカナダへ留学できることになった。

そこで私はその担当であった先生と、一緒にカナダに行く四人の友達に出会った。留学に向け、何度かミーティングをするうちに、カナダに行った先輩方とお会いする機会があり、先輩方の英語の流暢さに感動すると同時に、私たちもこうなりたいとグループ全員で思った。カナダに行くグループの伝統として、留学から帰ってきてからのＴＯＥＩＣの点数の伸びが他に比べ、すごく良いということを知った私たちは、留学前にグループ全員、ＴＯＥＩＣ６００点達成という目標を掲げた。

それから二か月間、範囲となった部分の問題集をやり、随時先生による確認テストが行われた。私はもう大学生活で失敗したくないと思い、そのテストで高得点を取れるように勉強した。しかし、一回目の確認テストは、最悪のものだった。自分ではやったつもりだったが、それは単なる「やったつもり」であって、全然自分の力になっていなかったのだ。そのとき、先生に言われた言葉は、「これで、本当に勉強したの？」だった。私は、本当に悔しかった。でも、この悔しさが私を変わらせてくれた。やったつもりではなく、自分の力になる勉強をしなきゃいけないと。

それからは、勉強方法も変え、今まで以上に努力した。ただでさえ、大学の英語の授業は宿題が多いというのに、そのうえにＴＯＥＩＣの勉強もしないといけなかったため、ほぼ毎日三時間ぐらいしか寝られない日々が続いた。学校でも、お昼や空き時間、少しでも時間があれば、ＴＯＥＩＣの勉強をした。そんな生活が時々、嫌になることもあり、たまに泣きながらＴＯＥＩＣの公式問題集を解いていたような気もする。しかし、その結果、私は留学前に、６００点を超えるという目標を達成することができた。

ある程度ＴＯＥＩＣの点数もあることだし、会話も困らないのではないかと、甘い考えでカナダへと飛び立った。そして始まった七か月間のカナダでの留学生活。はじめに直面することになった困難は、ホームシックであった。

私は、日本にいる間は家族に頼ってばかりの生活を送っていたため、初めて家族から離れて生活をすることになり、とても戸惑った。それに加え、私は自分の語学力の足りなさ。はじめは自分が相手に伝えたいことを、まったく伝えることができず、自分の語学力の足りなさを痛感させられる日々が続いた。楽観的に、留学に行きたいなどと言った自分に、とても後悔し、毎日、日本に帰れる日までの残りの日数をカウントした。

そんなとき、いつも周りの友達が私の心の支えになってくれた。そのおかげで、カナダの生活にも慣れてきた頃、徐々に、「このまま気持ちが落ち込んだままでは、せっかくの貴重な七か月が、なにも残らない無駄な七か月になってしまう」と思い直せるようになった。

留学先での勉強

それから、心を入れなおし、語学力を身につけようと必死に

なった。しかし三か月が経っても、一向にスピーキング力が伸びる気配がなかった。周りのみんなは、順調にスピーキング力を身につけられているように思った。それにもかかわらず、私の場合は、来たときとなんら変わらないスピーキング力。あと四か月で日本に帰らなければいけないのに、スピーキング力がまったく上がらないという焦りから、涙を流す日もあった。

このままでは四か月後日本に帰れないと思った私は、カナダ担当の先生にメールで相談してみることにした。すると先生は、「三つの特訓(音読を五〇回・鏡を見ながら独りごと三〇分・授業で発言する内容の準備)を一か月続けなさい。そうすれば、次第に効果が現れます」と言って、アドバイスをくれた。留学に行く前のＴＯＥＩＣも、先生のアドバイス通り信じて勉強したら、みるみるうちに点数が伸びたから、今回の先生のアドバイスも信じて続ければ、絶対に効果が現れると思った。

そこで、すぐにその特訓を毎日欠かさず始めた。毎日出されるたくさんの宿題に加えての三つの特訓は、とても大変だった。それと同時に、私の会話をする際の態度を見つめ直すことにした。それまで、語学力不足のせいもあって、自分から話しかけるというよりは、周りの人から話しかけてもらい、それに答えるといった受け身のコミュニケーションをしていた。だから、人よりもスピーキング力が伸びるのに時間がかかってしまうのかもしれないと思った。そこで、私も周りの積極的に会話をする友達を見習って、自分から周りの人に声をかけるように努力した。

そのような特訓の日々を過ごし、留学もあと残り一カ月ほどになった頃。自分でも気づかないうちに、ホストファミリーと、三か月前にはできなかったようなテンポのいい英語での会話ができるようになっていた。私が留学行く前に夢見ていたように、ペラペラと英語を話せるようになっている自分自身がはじめ信じられなかった。見事に、その特訓の成果が現れたのだ。周りの友達やホストファミリーからも、「最近、スピーキング力上がったんじゃない！？」と言ってもらえるようになった。とても嬉しかった。「先生のアドバイスはいつも正しい！　先生出会えて、よかった」とほんとうにそう思った。

帰国してからの私

こうして留学生活も終わり、日本に帰国した。次の課題は、ＴＯＥＩＣで８００点を取ることだった。カナダに留学に行った先輩たちが、八百点を取っていたので、私にも絶対できるはずと思った。留学中はスピーキング力を磨くことを中心にしてきたが、帰国してからは、留学前にしていたＴＯＥＩＣの勉強法をもう一度思い出し、繰り返し、繰り返し、同じ参考書を解いて、勉強した。

そして、帰国後３か月後に、見事８００点を超えることができた。自分でも信じられなかった。高校時代には、やっても、やっても、全然結果を残すことができなかったのに、大学に入ってからは、努力すればすべて良い結果となって返ってくることが。

就活で初めて望んだ道へ

大学三年生の冬。ついに就職活動が始まった。私は、父の影響もあり、自動車関係の会社で働くことを夢見ていた。大学生活で私が力を入れてきた英語を活かして働きたいと思った。先生にアドバイスをもらいながら、履歴書を作成したり、面接の練習をしたりと、忙しい日々を送った。

今回の就職では、もう失敗できないと思った。今まで、高校受験も、大学受験も、自分の望んだ第一志望には合格できなかった。でも、今回はできることは大学生活すべてこなしてきたし、あとは今まで蓄えてきたすべての力を発揮し、絶対に夢を叶えるんだと心に誓った。

そうして、書類選考、何度かの筆記試験、面接試験を突破し、四月の終わり、第一志望の企業から内々定を頂くことができた。本当に嬉しかった。はじめて自分の望んだ道に進めたように思った。家族も、いつも第一志望に進めない私が、今回初めて、望んだ道に進めることになり、とても喜んでくれた。

偏差値がすべてではない

今まで、思うように進めなかったり、いろいろな困難に出会ったけれど、それらはすべて今の自分に繋がるためのステップだったのかもしれないと思い、このとき初めて大学受験での失敗に、しっかりと向き合えたように思う。大学に入ったばかりの頃は、女子大にしか入れなかった自分を恥ずかしく思ったけれど、今は胸を張って、この大学に入ってよかったと言える。この大学にいなかったら、温かくサポートしてくれる先生や、同じ目標に向かって頑張りあえる友達とも出会うことができなかったから。

高校まで偏差値ばかりに捕らわれていた自分は、いったいなんだったのだろうか。偏差値が、人の人生をすべて左右するはずがないのに。あの頃の私は、自分の中では頑張っているつもりだったが、それは単なる「つもり」であり、自分に甘かったのだと、今振り返ってみて思う。あの頃は、偏差値だけで、進学先の価値を見出していただけだから、自分自身の目標に対する本気さが足りなかったのだろう。

大学受験に失敗して、両親から、新たな価値観を教えてもらえて本当に良かったなと思う。あのとき、「人生偏差値がすべてではない」という新しい価値観を学べたからこそ、私自身の視野、世界観が広がり、人間としてまたひとつ成長できたように感じる。いつも、どんなときも、私を近くで支えてくれた家族には、本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。